

外国籍日本留学経験者による主観的キャリア形成プロセス TEA で可視化する多様性の背後にあるもの

発行：2025 年 11 月 25 日
[掲載決定: 2025 年 8 月 16 日]

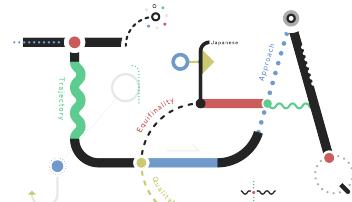
畠 あやか（大阪キリスト教短期大学日本語別科）

概 要

本研究では、留学生のキャリア観の多様性を明らかにするための一例として、現在研究が不足している留学生の「主観的キャリア」に焦点を当て、「日本に留学し、日本で学位を取得し、一定期間就労経験（職業キャリア）を積んだ外国籍日本留学経験者」3名に対し、インタビュー調査を実施した。調査手法には半構造化インタビューを採用し、時間軸に沿って、留学を開始した当初から現在に至るまでの経験や葛藤と一緒に振り返りながら、キャリア選択についてなど、その都度、話題に上がったことを自由に語ってもらった。また分析手法には、複線径路等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach: TEA) を採用し、「複線径路等至性モデリング (Trajectory Equifinality Modeling: TEM)」によって描き出された人生の径路をもとに、彼らの「キャリア観」がどのように変容していったのかを発生の三層モデル (Three Layers Model of Genesis: TLMG) により明らかにした。調査の結果、3名の「キャリア観」の形成過程には多様性がある一方で、環境と個人の相互作用のなかで、受け身的意識から主体的意識へと変容する共通のプロセスが確認された。またキャリア観だけではなく、「留学の意味」や「自己認識」、「日本という国」に対する認識にも変容が確認され、その変容は様々な経験、特に周囲の人との「出会い」と「環境」に深く関わっていることが明らかになった。

キーワード：留学生、主観的キャリア、キャリア選択、複線径路等至性アプローチ

連絡先：畠 あやか（E-mail: a.hata@occ.ac.jp）



Diversity in Subjective Career Development of Foreign Graduates in Japan:

Insights from the Trajectory Equifinality Approach (TEA)

Published: November 25, 2025

[Accepted: August 16, 2025]

HATA Ayaka (*Osaka Christian College, Preparatory Japanese Language Course*)

Abstract

This study examines the diversity of subjective career perspectives among international students who studied in Japan, earned academic degrees, and gained work experience. Semi-structured interviews were conducted with three participants, tracing their experiences from the start of their studies to the present, enabling reflection on career choices and related themes. The analysis applied the Trajectory Equifinality Approach (TEA), utilizing Trajectory Equifinality Modeling (TEM) to map their life paths and the Three Layers Model of Genesis (TLMG) to clarify the changes of their career perspectives. Results highlighted diversity in the process of career formation and a shared shift from passive to proactive orientations through the interactions between individual and their environment. Transformations were observed in the perceived meaning of studying abroad, self-awareness, and perspectives on Japan, which were strongly influenced by social encounters and environmental contexts.

Keywords: International Students, Subjective Career Perspectives, Career Choice, Trajectory Equifinality Approach (TEA)

Correspondence concerning this article should be sent to:
HATA Ayaka (E-mail: a.hata@occ.ac.jp).

はじめに

日本社会全体の労働力不足が社会問題となっている今、留学生の受け入れだけではなく、送り出しを含めた就職支援や長期的なキャリア支援体制の構築は喫緊の課題である。一方それらの対策は必ずしも成功しているとはいはず、教育機関の行っているキャリア支援と留学生、言語教育者の間には多様な「ずれ」の問題が生じていることが指摘されている。寅丸・江森・佐藤・重信・松本・家根橋（2018）は、その1つに「キャリア」や「キャリア支援」「キャリア教育」といった用語概念の曖昧性から生じる「キャリアの捉え方」に対する認識の「ずれ」を挙げ、問題視している。留学生の特性を踏まえた適切な支援を行うためには、まず留学生が自分自身のキャリアをどのように捉え、何を目指しているのか、留学生の意識の実態を把握することが重要であるといえよう。

そこで本研究では、現在研究が不足している留学生の「主観的キャリア」に焦点を当て、そのキャリア観は留学や就職経験を経てどのように変容していくのか、複数名の外国籍日本留学経験者の「語り」から【日本留学-就職活動-内定-就職-職歴を積む】という一連の主観的キャリア形成プロセスを明らかにするためにTEAでその経路を可視化する。そして、留学の多様性の背後にある共通性を見出し、大学などの教育機関が行う留学生キャリア支援への視座を提示することを課題とする。これにより留学生キャリア支援に関する研究や取り組みにおいても、「客観的キャリア形成」の観点だけでなく、「主観的キャリア形成」の観点からキャリア支援のあり方を検討することができ、長期的なキャリア支援体制構築に向けた議論を深めていくためにも意義があると考える。

先行研究と本研究の位置づけ

1. 「主観的キャリア形成」におけるキャリア支援の現状と課題

現在の日本社会において「キャリア」という用語は、個人の職業や職業経験を表す「ワークキャリア」と、個人の生涯や生き方の全てを含む「ライフキャリア」とがしばしば混在して用いられている。前掲の寅丸ら（2018）

でも指摘されていたように、「キャリア」という用語は、概念自体が曖昧になったまま、言葉だけが独り歩きをしていることが多い。そのため、「キャリア」をどのように捉えるのか、本研究での「キャリア」の定義について考えていく。

渡部（2020）は、全体・統合的な「ライフキャリア」が職務上のキャリアである「ワークキャリア」を包括する関係にあると考えた上で、キャリアを考えるもう一つの枠組みとして、「客観的キャリア」と「主観的キャリア」を挙げている。これらは、渡部（2020）内で示されている図によると、「ワークキャリア」を「客観的」「主観的」という側面からさらに2つにわけたものである。前者の「客観的キャリア」は、個人の職業や職業経験など誰の目から見ても客観的に把握できるものであり、後者の「主観的キャリア」は、個々のキャリアの意味づけや働き方に関わる価値観など、周りからは見えない個人の内面に関わるものであるという。渡部は、個人が自分自身の理想や希望、様々な状況や情報に基づいて、どこで何をするのかを決定し、自分で意思決定をその都度行っていくことこそがキャリアの本質であるとし、留学生や外国人社員の「主観的キャリア」はどのようなものなのか把握する必要があることを主張した。

これまで留学生のキャリアにおいては、日本語教育の分野で「ビジネス日本語」の研究や実践が盛んに行われてきた。しかしこれは、「外国人」の就労・就業場面における言語文化的困難の解決を目指したものであり、その多くが「客観的キャリア形成」の視点から言語を捉えたものである。すなわち、企業側・教育機関の視点など、留学生本人ではない当事者外部の視点からのアプローチが中心であった。留学生のキャリア形成や支援に関する研究や取り組みにおいても、日本企業で流通する日本語や企業文化の可視化、またその理解促進を目指す「客観的キャリア形成」に関する研究が主流となっており、「留学生のキャリアとは何か」という点においても、「主観的キャリア」という側面から議論されることはない。また山本（2018）が指摘するように、留学生の就職に関する調査においても、その多くが意識調査や実態調査で留まっており、「就職希望の有無・内容等の把握を超えて、その背景にある個々人の生き方や働き方を規定する価値観やキャリアについてのプラン、デザインに踏み込んで調査したものはほとんどない」（末廣、2013, p. 280）ことが指摘されている。

留学生だけでなく、「外国人」と「日本人」が共に働き、生活する多文化社会の実現が急務となっている昨今、「主観的キャリア形成」の研究は大きな意義を持っている

るといえる。留学生のキャリア支援のあり方を巡って、日本国内での就職を実現した（元）留学生 1 名の語りを取り上げた山本（2019）は、その議論の発端としての一事例を示している。しかしこの調査では、個人のキャリアの深みを探るべく韓国籍の女性 1 名のみを対象としており、調査対象の時期区分としても、留学開始から卒業し働き始めるまでの時期と限られている。「多様化する留学生のキャリア意識が、留学生活においていかに育まれたのかを長期的な視点から探ろうとする研究は非常に数少ない」（山本、2019, p. 82）ことが指摘されているように、留学生のキャリアを主体的に捉えられた自己のあり方の変容として描いた研究は決して十分とはいえない、留学、就職といった人生の転機を巡る経験の語りが更に重層的に採取され、研究されていく必要があるといえよう。そして、今後さらに留学生の多様性に伴うキャリアやキャリア観の多様性をも明らかにしていくためには、1 名を対象とした分析のみではなく、複数名を対象とした分析も必要になってくるだろう。

そこで本稿では、キャリアを職業や職業経歴にとどまらず、職業以外の経験や役割も含めた人生全体の経歴・役割を領域として捉える。その上で、履歴書などで外部から評価される客観的側面ではなく、個人の内面に関わる価値観の変容という本人にしかわからない主観的側面を捉える。つまり本稿での「キャリア」は、領域は広義で、視点は主観的として使用する。なお、文部科学省の定義でも引用されているスーパー（Super, 1990）は、キャリアを広域に捉え、ライフキャリアという概念を提示している。本稿のキャリアはこれに近いものであり、そのライフキャリアを主観的側面から捉える研究となる。

2. 本研究におけるキャリアを捉える視座

次にキャリア観の変容については、主観的キャリアの説明枠組みとして有効と考えられる溝上（2004）の「アウトサイド・イン」「インサイド・アウト」という 2 つの概念を視点として分析・考察する。これは、溝上（2004）が浜口（1982）の間人主義論を援用し、1990 年代以降の現代青年に突出化し始めた人生形成の仕方を説明する際に「居場所・アイデンティティ論」で示したものである。「アウトサイド・イン」は「外から内へ」という意味であり、より高い学歴などの「外部の安定した指標」をもとに、自分の人生も社会が敷いたレールに乗るものだと捉えているような受動的な生き方の考え方を指している。そ

れとは逆の「インサイド・アウト」は、「自分のやりたいこと」や「将来の目標」を見つけ、それを基準に「自分の生き方」や「生きる“場所”」を自分自身で決めていこうとする主体的な生き方の考え方である（溝上、2004）。前節で挙げた「客観的キャリア」と「主観的キャリア」の枠組みに、「アウトサイド・イン」「インサイド・アウト」の概念を適用すると、自己の外側（=客観的キャリア）に重点を置いて、そこに自身の内側（=主観的キャリア）を合わせる考えが「アウトサイド・イン」であり、それに対して、自己の内側（=主観的キャリア）に重点を置き、そこから外側（=客観的キャリア）に向かう考えが「インサイド・アウト」であると理解できる。溝上（2010）は、現代の大学生のキャリア観の変化は、この「アウトサイド・イン」から「インサイド・アウト」への生き方への転換ということもできると述べ、現在の大学ではキャリア教育・キャリア形成支援のみならず正課教育の授業においても、学生の「インサイド・アウト」に基づく教育や指導がなされるようになってきていると指摘している。このように、日本人視点の「客観的キャリア」と「主観的キャリア」という二つの概念に関する研究は、価値観の変容とともに進みつつある。一方、日本語学習者のキャリア支援については、寅丸・中山・齋藤（2019）の調査が挙げられる。この調査では留学生のキャリア意識についての課題として、留学生自身がキャリアについて自律的に考え方行動できるようにするためのキャリア教育や学習者のキャリア意識の形成自体を支援していく必要性が示唆されている。

そこで本研究では、複数名の外国籍日本留学経験者の「語り」から【日本留学-就職活動-内定-就職-職歴を積む】という一連の主観的キャリア形成プロセスを明らかにすることを目的とし、上記理論を軸に、留学生特有の異文化間移動などの影響も含め、考察を深める。

研究方法

1. 分析の理論的枠組み

本研究では、複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach: TEA）（サトウ、2015）を採用し、「日本に留学し、日本で学位を取得し、一定期間就労経験（職業キャリア）を積んだ外国籍日本留学経験者」3 名に歴史的構造化ご招待（Historically Structured

Inviting: HSI)を行った。TEAは、ある選択をしなかった場合のプロセスも同じ時間軸の中でTEM/TLMG図として重ね合わせて描くことができ、その点においても留学生のキャリア観形成プロセスを捉え可視化する上では意義があると考え、TEAを選択した。具体的な分析手順については、後の分析の章において詳細を記述する。

2. 調査協力者の概要

本研究の調査協力者は、日本に留学し、日本で学位を取得し、一定期間就労経験（職業キャリア）を積んだ外国籍日本留学経験者のガク、オン、センの3名（すべて仮名）である（表1）。留学スタイルや性別が異なる3名に調査協力を依頼したのは、外国人留学生の半数近くを占める中国人留学生（日本学生支援機構、2023）においても、留学生活の間に経験した出来事や葛藤によって、個々人の生き方や働き方を規定する価値観やキャリアについてのプラン、デザインは様々であり、経路の多様性を見ることができると考えたからである。以下に示す表1は、3名の出身、性別、留学スタイルや期間、現在の就職先に加え、パートナーの有無、インタビューを行った日時を一覧にしたものである。その他、留学動機など個人の背景については、後の分析の章において詳細を記述する。なお3名とも知人を通して出会った協力者であるため、筆者との親密度は、インタビュー開始時点での初対面であった。

3. 調査手法と本研究におけるデータ

調査手法には半構造化インタビューを採用した。筆

者と協力者3名の居住地が遠方であったことを考慮し、下記(1)～(3)の手順で2022年7月頃から12月頃にかけて、Zoomを使用した計3回のオンラインインタビューを一対一で実施した。3名とも日本語学習を開始してから10年程度経過しており、現在も仕事で日常的に日本語を使用している日本語話者であるため、インタビューは全て日本語で行った。インタビューは、協力者に録音の許可を得た上でZoomの録音機能を使用し、後日、筆者が文字化作業を行った。レコーディング記録、及びレコーディング記録の文字化資料を本研究におけるデータとした。またTEAの手法に基づき、計3回のインタビューを進める中で、協力者の語りに丁寧に耳を傾け、協力者にとっての良き理解者になれるよう努めた。以下、3名それぞれに対し計3回行った一対一オンラインインタビューの手順についての詳細である。

(1) インタビュー1回目：

協力者に事前に作成していただいたライフライン図（留学開始当初から現在までの充実度や幸福度の高低の変化を図にしたもの）を基に、時間軸に沿って、留学を開始した当初から現在に至るまでの経験や葛藤と一緒に振り返りながら、その都度、話題に上がったことを自由に語ってもらった。

(2) インタビュー2回目：

1回目のインタビューデータを基に筆者が作成したTEM図をみながら理解の共有を図り、以下6項目の追加の質問を行った。

① ワークライフバランスをどのように考えているのか

表1 調査協力者一覧

仮名	出身	性別・年齢	留学スタイル	留学期間	就職先	合計就労年数	パートナー	インタビュー日時 (年月日)
ガク	中国	男性(20代後半)	編入留学 →院進学	計4年 (学部2年・院2年)	日本・広告代理店 →日本国内で転職	3年	有(中国人) 既婚	(1)2022.7.10
								(2)2022.11.2
								(3)2022.12.6
オン	中国	男性(20代後半)	正規留学 →院進学	計7年 (学部5年・院2年)	中国・国有会社 →中国国内にある 日本企業の支店へ転職	1年	有(中国人) 未婚	(1)2022.7.22
								(2)2022.10.27
								(3)2022.12.3
セン	台湾	女性(20代後半)	交換留学 (半年×2回)	計1年 (交換留学2回分)	日本・重機部品メーカー →国内で転職予定	3年	有(日本人) 既婚	(1)2022.7.31
								(2)2022.11.21
								(3)2022.12.13

- ② あなたにとっての優先順位は何か（仕事や家庭など）
- ③ 今後の人生設計について（日本に居続けるのか、国に帰るのか、日本に再び来る可能性はあるか）
- ④ あなたにとってのキャリアとはどういうものか（比喻で例えるとすれば）
- ⑤ あなたにとっての自分らしく働くとはどういうことか
- ⑥ 日本へのイメージの変化や留学の意味付けについて

(3) インタビュー 3 回目：

2回目のインタビューデータを基に修正を加え、精緻化した TEM 図や TLMG 図を再度共有し、最終確認を行った。

4. 倫理的配慮

研究における倫理的配慮として、3名には事前にメールで研究の目的を説明し、内諾を得た上で、Zoom を用いてプライバシーの保護と匿名性の担保、研究への参加と辞退の自由等についての説明を行った。その後、研究協力の同意を書面で得た上で、それぞれ計 3 回のインタビューを上記 (1) ~ (3) の手順で行った。

5. 分析方法

(1) TEM (複線径路等至性モデリング)

具体的な手順としては、まず筆者が興味関心を持った「外国籍日本留学経験者が日本語を活かして就労経験

を積む」といった事象を等至点 (Equifinality Point = EFP) に設定した。次に、経験者の語りをデータとして、日本での留学生活開始から現在に至るまでの時間軸においての彼らの経験や葛藤を、その周囲の環境や社会状況、個人の経験の内部に取り込まれた文化までも含めて捉え、経験の変化を連続的に描き出し、3名それぞれの TEM 図を作成した。以下、表 2 に TEM の概念と本研究における意味を示す。

(2) 発生の三層モデル (TLMG)

本研究では、TEM によって描き出された 3 名それぞれの径路を基に、経験や葛藤を経て変容した価値観や信念を TLMG で分析した。具体的な手順としては、TEM 図上に表れた彼らが進路を選択する上での重要な出来事や経験を第一層として取り上げ、そこから彼らが得た気づきや認識を第二層とし、それらの経験や気づきが積み重なった結果として、彼らの価値観や信念がどのように変容したのかを第三層に記述した。その際には、山本 (2019) の TEM/TLMG 図を参考にした。そして第三層における価値観や信念の変容プロセスを溝上 (2004) の「アウトサイド・イン」「インサイド・アウト」という 2 つの概念を視点として分析した。

(3) 本文中の表記について

本文中では、TEM 図において示された経験や社会的要素はすべて【】で提示し、その後の（）内に BFP (分岐点) や OPP (必須通過点), SG (社会的助勢) や SD (社会的方向づけ) 等の用語の略称を記載している。また、大学名などの個人を特定する要素については、すべて匿名化の処理を行っている。本文中で協力者のインタビュー記録における語りを直接的に用いる際は、本文に続けて「」内に直接下線を引いて記載している。な

表 2 TEM の概念と本研究における意味

概念	本研究における意味
等至点EFP(Equifinality Point)	外国籍日本留学経験者が日本語を活かして就労経験を積む
両極化した等至点:P-EFP(Polarized Equifinality Point)	日本語を活かさないで就労する
歴史的構造化ご招待(Historically Structured Inviting)	日本に留学し、日本で学位を取得し、一定期間就労経験(職業キャリア)を積んだ外国籍日本留学経験者
分岐点:BFP:(Bifurcation Point)	日本語を活かして就労経験を積む上で意味のあった出来事
必須通過点:OPP(Obligatory Passage Point)	日本語を活かして就労経験を積む上で経験せざるを得なかつたポイント
社会的助勢:SG(Social Guidance)	日本語を活かして就労経験を積むというキャリア形成を後押しした力
社会的方向づけ:SD(Social Direction)	日本語を活かして就労経験を積むというキャリア形成を抑制・阻害した力
セカンド等至点:2nd EFP(Second Equifinality Point)	「自分の適性に合った仕事を通じて、自分らしく働く」など
両極化したセカンド等至点:2ndP-EFP(Second Polarized Equifinality Point)	「自分の適性に合わない仕事を通じて、自分らしく働けない」など

お、インタビュー内容の表記は、いずれも原文はそのままの記載を基本としているが、内容理解に補助が必要な場合のみ（*）を用いて筆者による注釈を加えている。

結果と分析

本章では、3名のインタビューデータを基に作成したTEMとTLMGの統合図を用いながら、3名それぞれが本人にとっての等至点となる2nd EFP（自分の適性にあった仕事を通して、自分らしく働く）に至るまでの経験や葛藤、それによって構築された価値観や信念の変容プロセスをガク、オン、センの順に分析する。

1. ガクのキャリア観形成プロセス

(1) 2nd EFPに至るまでの経緯

ガクの語りからは、日本での留学生活や就職経験を通して、「キャリアの意味づけ」に対しての認識や価値観に「アウトサイド・イン」から「インサイド・アウト」への大きな変容が見られた。よって、2nd EFP（自分の適性

にあった仕事を通して、自分らしく働く）に至るまでのプロセスを、「キャリアの意味づけ」に対しての認識や価値観が大きく変容した出来事や行為選択である分岐点（BFP）に着目し、以下の5つの時期に区分した。

第1期：アウトサイド・イン前期

—「キャリア」とは何かわからない

第2期：アウトサイド・イン中期

—「キャリア」との出会い

第3期：アウトサイド・イン後期

—「キャリアプラン」が全て

第4期：インサイド・アウトへの変容期

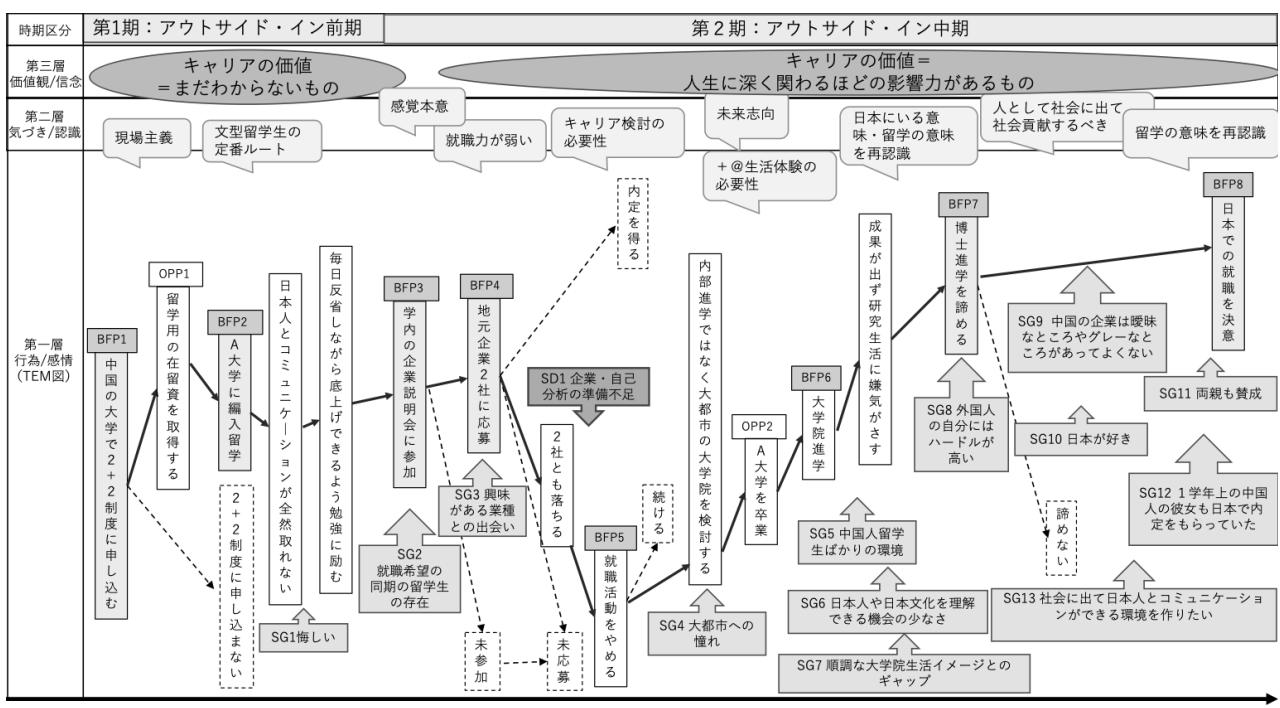
—「キャリアプラン」よりも大事なこと

第5期：インサイド・アウト構築期

—ガクにとっての「キャリア」

以下、統合したTEM/TLMG図（図1～図3）の第一層（TEM図部分）に示した各時期における経験や葛藤についての詳細を時系列に沿って記述し、それらがガクの「キャリアの意味づけ」に対しての意識や価値観にどのような変容を与えたのか、第二層、第三層で可視化された変容プロセスをもとに分析する。

図1 ガクのTEM/TLMG図・第1期～第2期



畠：TEA で可視化する留学生の主観的キャリア形成プロセス

図2 ガクのTEM/TLMG図・第3期～第4期

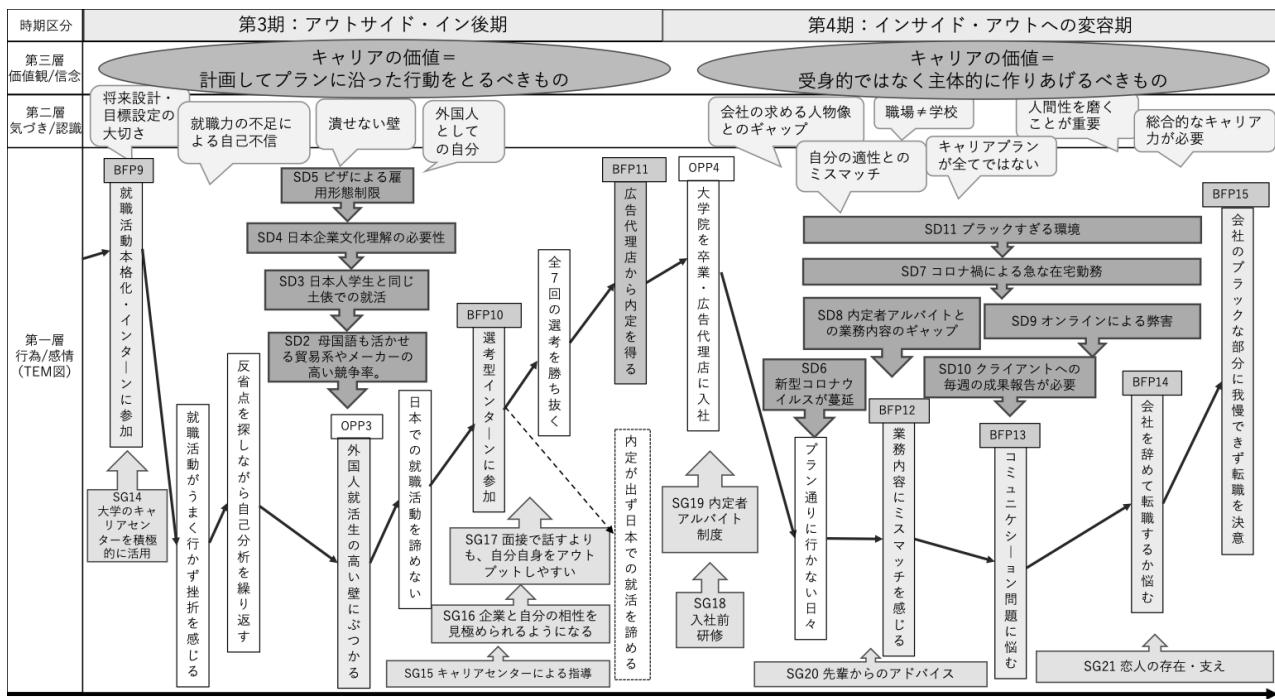
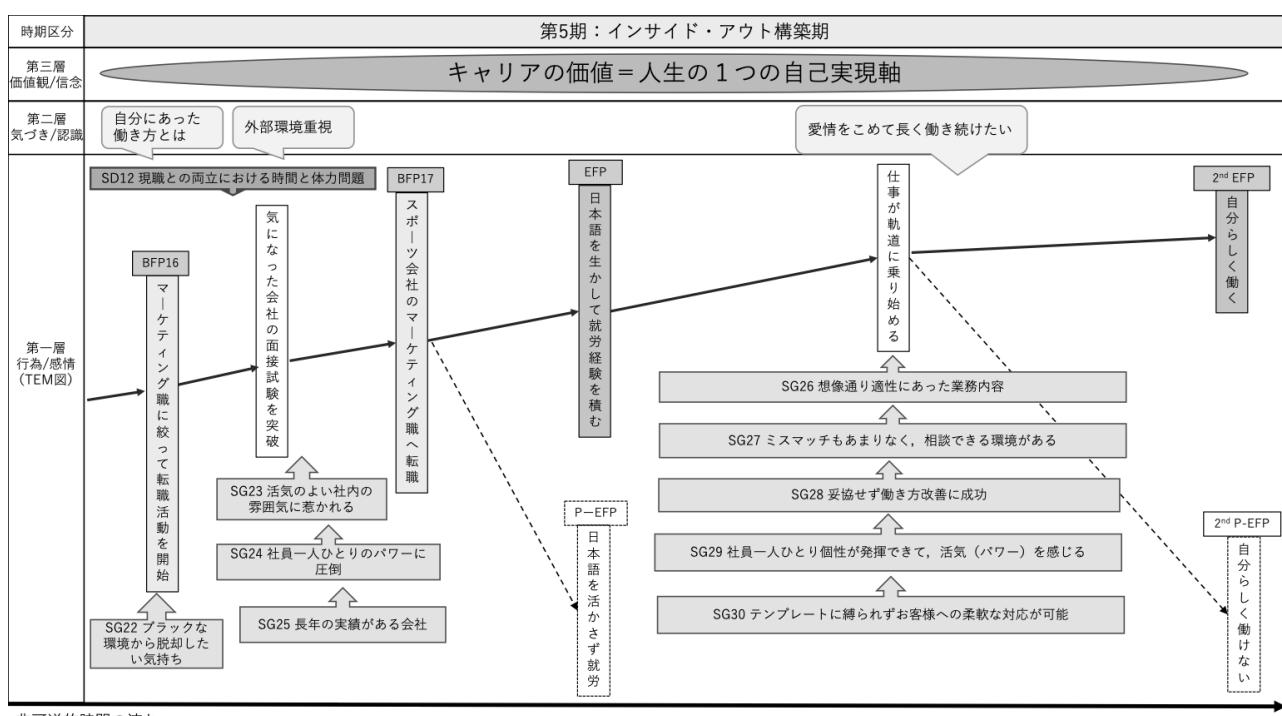


図3 ガクのTEM/TLMG図・第5期



(2) 第1期：アウトサイド・イン前期 —キャリアとは何かわからない

ガクが進学した中国の大学には、2年間母国で学んだ後、残り2年を日本の提携大学で学ぶことができる「2+2」という制度があった。ガクは第1期において、この【2+2制度に申し込む】(BFP1)という道を自ら選び、【在留資格【留学】を取得】(OPP1)し、日本の【A大学に編入留学】(BFP2)をした。しかし留学当初の目的は、あくまでも「外国語(*日本語)を学ぶため」だったとし、その当時は、「日本で就職するという考えが全くなかった」という。この時のガクの語りからは、「実際に外国語を学ぶためには、やはり現地現場に行かないと、なかなか言語の本質を身につけられない」と考えたことによって留学を決意したこと、また自分自身も「将来は文系の留学生の定番ルート」を辿り、博士まで進学したあとは、中国に帰国するものだと考えていたことが明らかになった。このような受動的な生き方の考えはまさに溝上(2004)の「アウトサイド・イン」によるものだといえるだろう。また、日本での留学生活が始まり、【日本人と全然コミュニケーションが取れない】という壁にぶつかったガクは、先生や友達など周りの日本人からは指摘されなかつたが、内心かなり悔しいと感じ(SG1)、大学での授業やアルバイト先でのことばの言い回しが、周りの日本人にとって失礼にならないように、【毎日、反省しながら底上げできるよう勉強に励んだ】という。この背景には、「日本で生活するには、言語の問題がクリアできないと他の生活も順調に上手くできないかもしれない」という意識が働いていた。また「現場になれることしか考えていないので、『キャリア』とは何かがまだわからなかつた」という語りからも、この第1期の段階においては、ガクが自己の内側(=主観的キャリア)について深く考える機会はあまりなく、自己の外側の「環境」に重点を置き、そこに自己を適合させる「アウトサイド・イン」による生き方だったことが明らかになった。

(3) 第2期：アウトサイド・イン中期 —「キャリア」との出会い

日本での生活が1年経過しても、留学当初からの院進学希望という考えに変化がなかったガクだが、就職を希望している同期の留学生の友達と話した(SG2)ことがきっかけで、「自分も説明会だけでも一度いってみようかな」と思い【学内の企業説明会に参加】(BFP3)し

た。また同時に、「もし自分に合いそうな企業があれば就職してみよう」と考え始めていたこともあり、説明会で気になった【地元企業2社に応募】(BFP4)した。しかし、企業分析や自己分析の準備不足(SD1)だったことから、結果的に【2社とも落ちる】結果となり、ガクは【就職活動を辞める】(BFP5)選択をした。ガクはこの時のことを「あのときは完全に感覚本意でした。特にロジック的な就職活動ができなかった」と振り返る。ガクは、この一連の就職活動を通して、2つのことに気がついたという。1つは、「(*自分の)日本で就職するための力(*日本語、コミュニケーション、異文化理解など)が弱い」ということだ。そしてもう1つは、「キャリア」ということばである。ガクは企業説明会へ参加することで、採用担当者がよく口にする「キャリアデザイン」「キャリア構想」といったことばに興味を抱くようになった。そして、自分なりに本やネットで調べてことばの意味を理解し、自分の場合はどういうキャリアデザインをすべきなのかと考え始め、どういう職場でどのような状態で働くかというところなども含めて、具体的に想像するようになったという。そのような中で初めて、「“キャリア”は人生に深く関わる複雑なもの」という認識がガクの中で生まれ、この段階では日本で就職するかどうか決めていなかったガクだが、「最終的にどの道に進むにしても、結局キャリアデザインというのは検討しなければいけない」と考えるようになったという。

またこの第二期においては、ガクの中で「留学の意味」についての意識にも変化が生じていた。【就職活動を辞める】(BFP5)選択をしたガクは、その後【A大学を卒業し】(OPP2)【大学院に進学】(BFP6)したが、進学先の大学院の研究科は、ガクと同じような中国からの留学生が大半を占めており、ガクは【日本人とコミュニケーションできる場が少ない】ことにデメリットを感じていた。また、研究科で辞書や古い本、コーパスなどで調査しているばかりでは何も意味がないと感じ始めたガクは、「人として社会に出て、社会に貢献すべきだ」と考えるようになったという。このように【研究生活に嫌気がさしていた】ガクは、「学校だけでは日本人や日本文化を理解する機会が少ない」と気づき、「日本人とコミュニケーションできる環境がないのであれば、日本にいる意味、留学の意味はあるのか。本格的に日本社会に入れないと、そもそも留学の意味もないのではないか。」と改めて自分自身が日本に留学に来ている意味について考え直したという。そして考え直す中で、第1期では「外国語(*日本語)を学ぶため」だったガクの中での「留学の意味」が、「お金や時間をかけて海外で留学する以上は、

やっぱり何か、意味があることをやらないといけない」といったように変化していくのであった。そして第2期では、このように「キャリアの意味づけ」と「留学の意味」に関する認識に大きな変容があったことがきっかけで、ガクは留学当初から思い描いていた【博士進学を諦め】(BFP7), 【日本での留学を決意】(BFP8) したのであった。

(4) 第3期：アウトサイド・イン後期

—「キャリアプラン」が全て

【日本での就職を決意】(BFP8) したガクは、企業説明会やインターンに積極的に参加し、自己分析や業界分析など【本格的に就職活動を始めた】(BFP9)。同時に大学院のキャリアセンターを積極的に活用する (SG14) ことで、キャリアプラン作成などにも取り組むようになり、就職3~5年後にどういうポジションになるべきかといったような自分像も描くようになったという。就職のことだけではなく、少し先の将来までを見据えた上でプランを作っていた理由について、ガクは「外国人にとっては難しいところがあるんですけど、やっぱり目標をまず持たないと、そもそも行動できない」と語った。また、日本人学生と同じ土俵での就活 (SD3) といったような【外国人就活性特有の高い壁にぶつかる】(OPP3) 経験などを通して、壁を取り除くために大変な努力をしたというガクだが、同時に「どうしても潰せない壁はあると思います。そもそも違うんで。」と「日本で働く上での外国人の自分」といった気づきや認識についても、さらに深まっていったことが明らかになった。このようにしてガクは就職活動で失敗するたびに反省点を探しながら自己分析を繰り返し、その過程で徐々に企業と自分の相性を見極められるようになったという。またそれと同時に自分自身の2~3年後のイメージを考え、キャリアプランをさらに具体的に作っていったという。就職活動時点から就職後の自分像を考えていたことについて、ガクは先に述べた大学のキャリアセンターの指導やそれによって参加したインターンシップの影響によるもの (SG15) と語る一方で、「外国人としてやっぱり難しいところがあるんで、最初からちゃんとプランを立てないと上手く就職活動できない。いろいろな制限がありますので、ちゃんとプランを作って、そのプランに沿って行動しないといけないという、多分そんなに自由ではないですよ。」と外国人として日本で就職活動をする上での雇用ビザなどの制度的な制限 (SD5) も強く影響したと語った。そして最終的に、面接よりも自分自身をアウトプッ

トしやすい (SG17) という理由から【選考型インターンに参加】(BFP10) し、【全7回の選考を勝ち抜き】、無事【広告代理店から内定を得る】(BFP11) ことができたのであった。このように日本での本格的な就職活動経験を通して、ガクは「日本で働く上での外国人としての自分」を意識し、「キャリアプラン」を立てること、そして「それに沿った行動をする」ということを強く重視するようになっていった。

(5) 第4期：インサイド・アウトへの変容期

—「キャリアプラン」よりも大事なこと

【大学院を卒業し、広告代理店に入社する】(OPP4) 直前の春、【新型コロナウイルスが蔓延】(SD6) したことによって、入社同時にコロナ禍に巻き込まれたガクは、入社早々在宅勤務を余儀無くされた (SD7)。また実際の業務が始まるや否や早々に、内定者アルバイトで経験していた業務内容とのギャップ (SD8) から【業務内容にミスマッチを感じ始めた】(BFP12)。このような自分が思い描いていたプラン通りの生活を送れない日々が続く中、ガクは、「キャリアプランは自分が思った通りにうまく進めない時があることを身を持って意識するようになった」という。また、在宅勤務が強いられている (SD7) ことで、クライアントとオンラインのみでしかコミュニケーションを取ることができず (SD9), 【コミュニケーション問題に悩む】(BFP13) 日々が続いた。このような日々が1年近く続く中で、当時まだ新卒1年目であったガクは、現実的にはあまり経験やスキルもないし、転職してもあまり良い会社にはいけないかもと躊躇しながらも、【会社を辞めて転職するかどうか】(BFP14) ということに、かなり悩み葛藤したと振り返る。そんなガクを支えたのは、大学院時代から付き合っている恋人だった。恋人の存在や支え (SG21) があったからこそ、1人であれば帰国してしまっていたかもしれないような困難があっても、2人で乗り越えられると感じた (SG21) という。このような転職に関する葛藤を通して、ガクは「一度入社をしたら力がつくまでは安易に転職をしないことが重要になるかもしれない」と考えていた入社前の意識が変化し、「激しく変化している世の中で、今だけではなく、先を見据えて年齢に応じた力をつけていくこと、技術や知識面だけではなく、仕事をする中で失敗や努力を通じて、“正しい判断力”や“周りとの調整力”などの人間性を磨いていくことが重要」だと考えるようになったという。最終的には【会社のブラックな部分に我慢できず転職を決意】(BFP15) することに至ったガ

クだが、「キャリアの意味づけ」に対しての認識が変化する中で、職場の対人関係に対しての認識にも変化が起こり、困難を乗り越えるための自信をつけるようになつたという。このように第3期においては、「アウトサイド・イン」によって意味づけられてきたこれまでのガクの「キャリア観」の中に、徐々に「自分が変わる」といったような「主体的な意識」が芽生えていく姿が明らかになった。この「主体的な意識」は、自己の内側に重点を置いた「インサイド・アウト」によるものだと考えられ、ガクの「キャリアの意味づけ」に対しての認識や価値観にも、「アウトサイド・イン」から「インサイド・アウト」への変容が確認された。

(6) 第5期：インサイド・アウト構築期

—ガクにとっての「キャリア」

「キャリアの意味づけ」に対しての認識が変化する中で、【マーケティング職に絞って転職活動を開始】(BFP16)したガクは、キャリアプランを立て直し始め、どんな環境でマーケティングをするのかといったような、働き方に対して自分が重要視したいポイントに気がつくようになった。広告代理店の仕事を続けながらの転職活動は、時間があまりなく、体力的には大変だった(SD12)が、ブラックな当時の会社を辞めて新しい環境に行ける(SG22)と考えると、気持ち的には楽だったという。このように自分自身にとってのキャリアを再認識しながら転職活動を続ける中で、面接時に惹かれた活気のよい社内の雰囲気が自分に合っている気がする(SG23)と感じたガクは【スポーツ会社のマーケティング職へ転職】(BFP17)した。ガクは【日本語を生かして就労経験を積む】(EFP1)の中で、【仕事が軌道に乗り始めた】現在の状況を振り返り、想像通り自分の適性にあった仕事を楽しくできている(SG26)と語る。前職と比べてミスマッチもあまりなく、もしなにかあれば相談できる環境(SG27)もあるそうだ。ガクは転職活動を通して、妥協せず働き方をかなり改善できた(SG28)といい、今後もしばらくこの会社で愛情をこめて長く仕事を続けたいと考えている。このようにして、社員一人ひとりが活気に溢れ個性が發揮できる雰囲気(SG29)の中、ガクは【自分の適性にあった仕事を通じて、自分らしく働く】(2nd EFP)ことができるようになったのであった。

2. オンのキャリア観形成プロセス

(1) 2nd EFPに至るまでの経緯

オンの語りからは、日本での留学生生活や就職経験を通して、「自己認識」に対しての意識や価値観に「アウトサイド・イン」から「インサイド・アウト」への大きな変容が見られた。よって2nd EFP(自分の適性にあった仕事を通じて、自分らしく働く)に至るまでのプロセスを「自己認識」に対しての意識や価値観が大きく変容した出来事や行為選択である分岐点(BFP)に注目し、以下の4つの時期に区分した。

第1期：アウトサイド・イン前期

—自己=結果で証明できるもの

第2期：アウトサイド・イン中期

—自己=結果だけでは証明できないもの

第3期：アウトサイド・イン後期

—自己=外部環境“に”適合させるもの

第4期：インサイド・アウトへの変容期

—自己=外部環境“と”適合させるもの

以下、統合したTEM/TLMG図(図4～図6)の第一層(TEM図部分)に示した各時期における経験や葛藤についての詳細を時系列に沿って記述し、それらがオンの「自己認識」や「キャリアの意味づけ」に対しての意識や価値観にどのような変容を与えたのか、第二層、第三層で可視化された変容プロセスをもとに分析する。

(2) 第1期：アウトサイド・イン前期

—自己=結果で証明できるもの

編入留学生として日本へやってきた調査協力者1人目のガクとは異なり、オンは高校を卒業後に母国の中の大学へは進学せず、日本の大学への正規留学という道を選択している。この選択の背景には、オンの出身高校の日本への大学進学率の高さ(SG1)が影響しているが、理由はそれだけではない。そもそもオンは中高一貫校に通っており、そこでは中学から高校へ内部進学するタイミングで、高校卒業後の進路希望に合わせた授業コースを選択することができ、中国国内の大学に進学、欧米留学、日本留学と3つの選択肢が用意されていた。当初はアメリカに留学したいと考えていたオンだが、中国から

図4 留学生の主観的キャリア形成プロセス

図4 オンのTEM/TLMG図・第1期

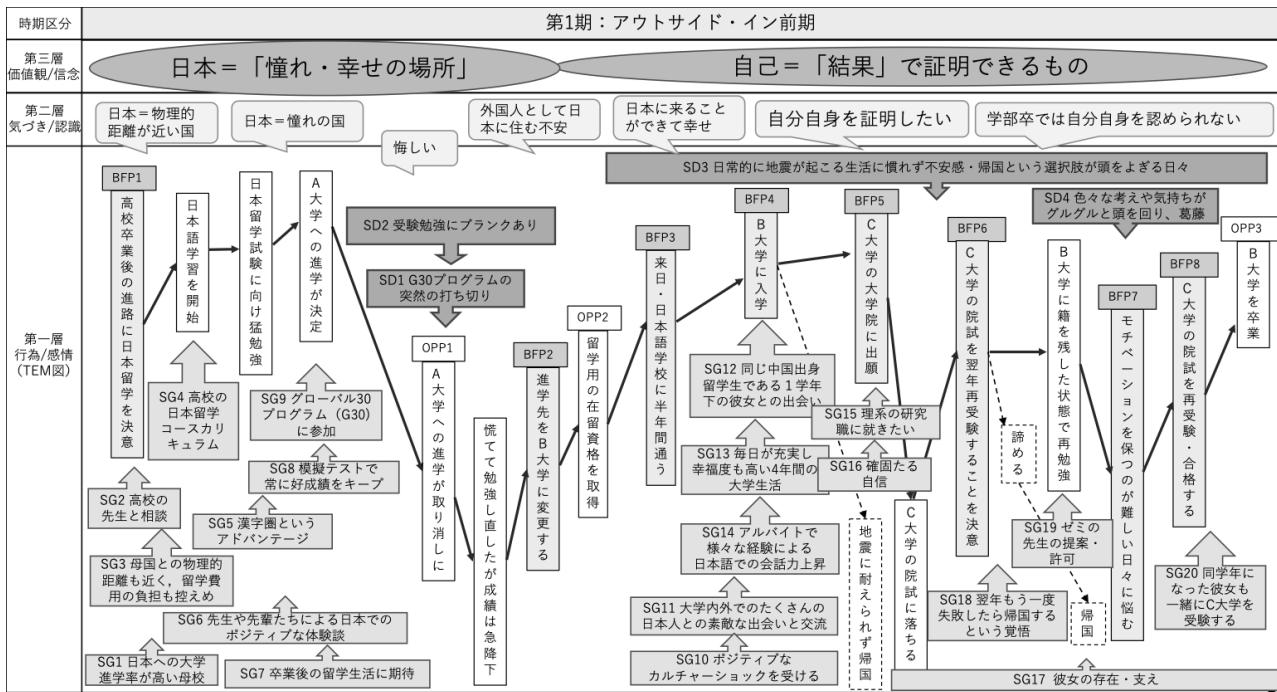


図5 オンのTEM/TLMG図・第2期

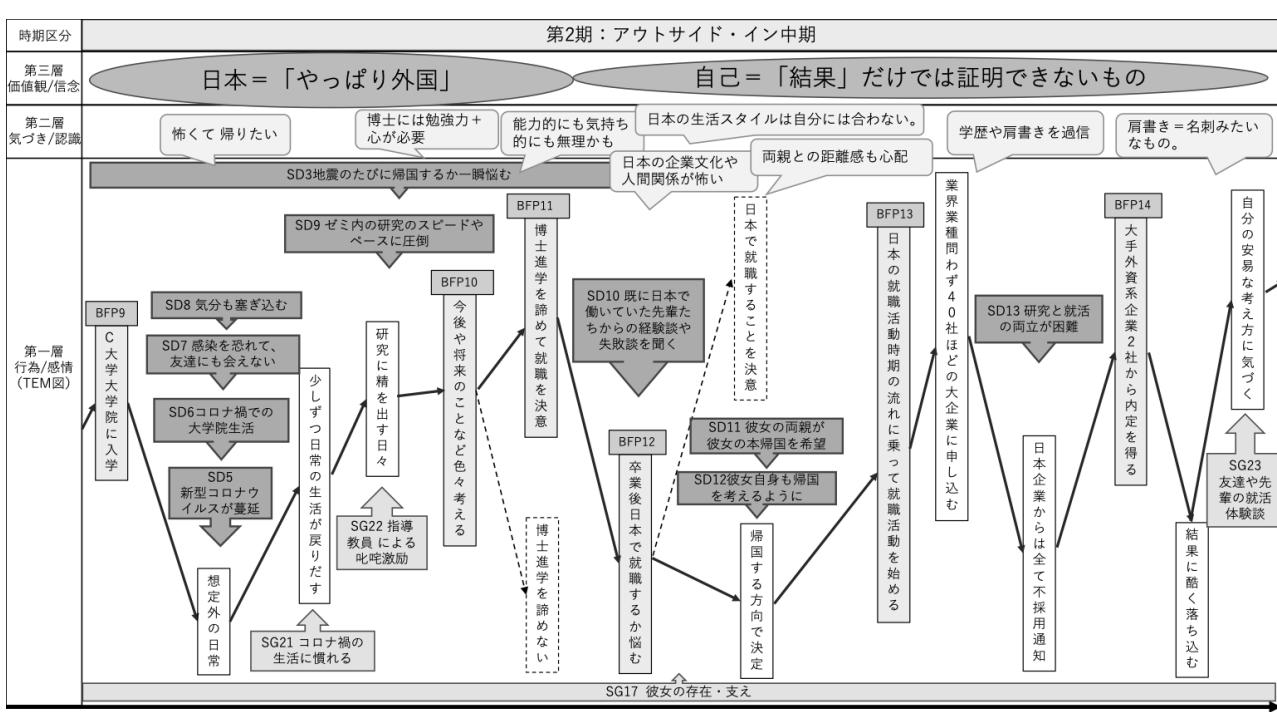
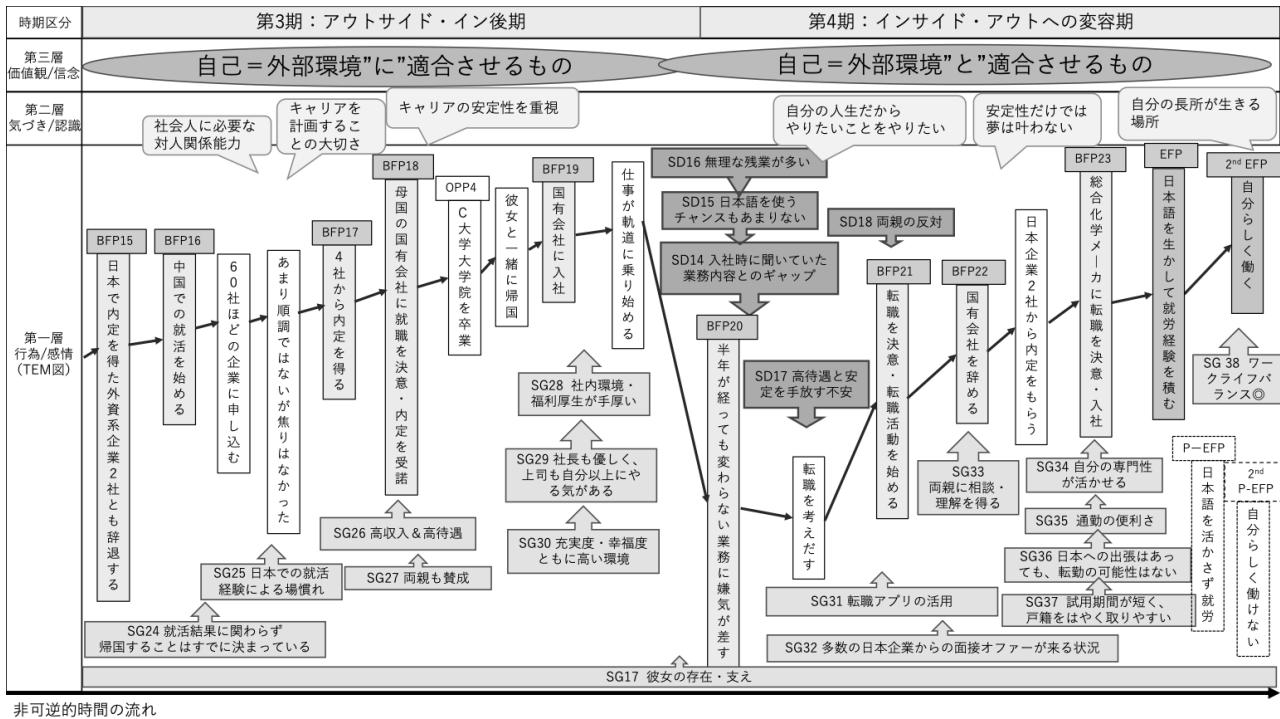


図 6 オンの TEM/TLMG 図・第 3 期～第 4 期



の距離の遠さと、渡航費の高さなどに悩み葛藤していた。そのような日々の中で、学校の先生とも相談し（SG2）、アメリカより母国と物理的な距離が近く、留学費用の負担も控えめな（SG3）【日本留学を決意】（BFP1）したのであった。高校への内部進学後に始まった日本留学コースカリキュラム（SG4）によって、【日本語学習を開始した】オンだが、同じ漢字圏というアドバンテージ（SG5）もあり、中国人である自身にとって日本語はあまり難しく感じなかったという。先生や先輩たちによる日本でのポジティブな体験談（SG6）を聞くたびに「羨ましい、自分も早く行きたい」と卒業後の留学生活に期待（SG7）が高まり、日本語学習のモチベーションを保ち続けることができたと振り返る。そしてガクは【日本留学試験に向け猛勉強】を継続し、模擬テストでは常に好成績をキープ（SG8）していた。その結果、高校2年生時に参加したグローバル30（SG9）によって、日本のA大学のコースに見事合格し、周りのクラスメイトよりも一足早く【A大学への進学が決定】した。しかし喜んだのも束の間、グローバル30事業が突如廃止される（SD1）という予想外の事態に巻き込まれ、それに伴う財政支援打ち切りによってオンが進学するはずだったA大学のコースも事業終了となり、オンの【A大学への進学は取り消しに】（OPP1）なってしまった。【A大学への進学が決まった】ことで安心し、合格後からほとんど勉強せ

ず、受験勉強にブランクがあった (SD2) オンは、【慌て勉強し直したが成績は急降下】し、最終的には【進学先を B 大学に変更】(BFP2) することにしたのであった。この結果を受けて、「悔しい」と感じたオンは、大学院は絶対にいい大学院に進学して「自分自身を証明したい」と強く感じるようになったと振り返る。高校在学中から、卒業後の日本での留学生活に期待し、「早く行きたい憧れの国」として日本を認識していたオンだが、実は来日直前には、「外国人として、地域の人に嫌がられたらどうしよう」という日本で住む上での不安も抱えていた。しかし【在留資格 [留学] を取得】(OPP2) 後、【日本に来日し、日本語学校に半年間通う】(BFP3) 間に、日本の食べ物や文化に対して、ポジティブなカルチャーショックをたくさん受けた (SG10) ことで、「日本の生活の充実度がどんどん上がっていった」という。また町ですれ違うたびに声をかけてくれる地域の人々との交流経験 (SG11) も、外国人であるオンにとって幸福度の上昇につながったといい、このような経験によって、オンの来日前の不安や心配は消え「日本に来ることができて幸せ」と感じるようになっていたことが語りから明らかになった。春になり、【B 大学に入学】(BFP4) したオンは、授業やサークル・アルバイト先でたくさんの日本人の友達ができたり (SG11)、同じ中国からの留学生だった 1 つ年下の彼女ができたり (SG12) と、毎日が充実し

幸福度も高い大学生活（SG13）を過ごしていたという。オンは4年間で3つのアルバイトを経験し、全てがいい思い出ばかりではなかったものの、アルバイト先で様々な経験をしたことで、日本に来日した当初は自信がなく話せなかった日本語での会話力も上がった（SG14）と振り返る。ただそのような順風満帆の留学生活を過ごしていたオンだが、地震にだけはどうしても慣れなかつたという。母国では地震が起こらずあまり耐性がなかつたオンにとって、地震はすごく怖いものだと感じられ、地震のたびに帰国するかどうか葛藤していた（SD3）と振り返った。

大学4年生になったオンは、留学当初から思い描いていた【C大学の大学院に出願】（BFP5）した。この時点では就職のことは全く考えておらず、理系の研究職という将来を見据えて（SG15）大学院進学を考えていたという。またこの選択の背景には、「学部卒の状態では自分自身を認められない」という自己認識も影響していた。大学4年間死守した好成績やTOEFLのハイスコアに加え、試験当日の手応えからも、希望のC大学の大学院に絶対合格できると確信（SG16）していたオンだが、合格発表時にオンの番号はなく、オンは【C大学の院試に落ちる】という留学生活で初めての挫折を味わつた。合否結果が信じられず、現実を受け入れられなかつたオンは、ショックでかなり落ち込み、これまでの勉強や生活の意味が全てなくなるようにも感じ困惑したという。しかしそんなオンも、同じ中国出身留学生である彼女の存在に支えられ（SG17）、彼女と話す中で自分の気持ちにもう一度向き合うことができたという。そして今回がラストチャンスで、もう一度失敗したら帰国するという覚悟（SG18）を決めた上で、「自分自身を証明したい」という想いから【C大学の院試を翌年再受験することを決意】（BFP6）だったのであった。ゼミの先生の優しい提案（SG19）によって、【B大学の研究室に籍を残した状態で再勉強】することを許可してもらったオンは、翌年の再受験に向けB大学で仮面浪人生活を送つた。しかしこの1年間の浪人生活は、再チャレンジしたいという気持ちがある一方で、もう勉強したくないという気持ちや、もし失敗したら本当に帰国するのか諦めるのかといったような葛藤などが、グルグルと頭を駆け巡り（SD4）【モチベーションを保つのが難しい日々に悩む】（BFP7）ことが多かったという。しかしそのような日々の中でもオンを支え続けたのは、やはり1学年下の彼女の存在（SG17）だった。オンが留年したことによって同学年になった彼女は、オンと一緒にC大学の大学院を受験する（SG20）ことを決め、同じ目標を持った彼女に支えられ

ながら、オンは【C大学の院試を再受験し、無事に彼女と一緒に合格する】（BFP8）ことができたのであった。このように元々努力家だったオンは、どんなことを目前にしても、自分に対して確固たる自信を持っており、その努力がうまく発揮されないことが何度かあったことで、次こそは「結果」で「自分を証明したい」と「自分で自分を認める」ことに強いこだわりを持ち挑戦していく姿が第1期では明らかになつた。また、この第1期の段階のオンの姿は、自己の外側の「肩書き」や「結果」に重点を置き、そこに自己を適合させる「アウトサイド・イン」による生き方とも捉えることができるだろう。

(3) 第2期：アウトサイド・イン中期

—自己＝結果だけでは証明できないもの

【B大学を卒業】（OPP3）し、無事に【C大学大学院に入学】（BFP9）することができたオンだが、入学した途端、【新型コロナウイルスが蔓延】（SD5）し、オンの大学院生活はコロナ禍という【想定外の日常】とともに幕を開けた。第1期においては、自分自身に対して確固たる自信があり、「結果で自分自身を証明する」ことにこだわりを持ちながら、「自分で自分を認められる」よう挑戦し続けたオンであったが、実際に大学院での研究生活が始まり、そのスピードやペースに圧倒されたこと（SD9）、元々計画していた博士進学に対して不安を感じるようになつていていた。入学後しばらくは、指導教員の叱咤激励もあり（SG22）、研究に精を出す日々を送っていたオンだが、次第に「博士は勉強力だけでなく心も必要。自分が本当にやりたい研究でなければ苦しい」と気づいたという。そしてそのような不安や気づきがきっかけとなり、大学院1年目の後半に差し掛かった頃には、【今後や将来のことなどを色々考える】（BFP10）ようになつていていた。オンはこの時点で、B大学での5年間とC大学での大学院生活1年間を合わせた計6年もの歳月を日本で過ごしていたが、改めて自分の将来と向き合う中で、「日本はやっぱり外国で、自分の生活スタイルとは合わない」と考えるようになり、オンの中での「日本という場所」に対する認識にも変化が生まれ始めていた。そして同時に、「自分の能力的にも気持ち的にも、博士進学は無理かもしれない」と考えるようになったという。葛藤の末、【博士進学を諦めて就職を決意】（BFP11）したオンは、コロナ禍や地震のことなど日本で生活する上で感じていた不安要素（SD3）に加え、既に日本で働いていた先輩たちからの経験談を聞いた（SD10）ことによって、「年功序列型など日本の会社の縦社会文化や人間関

係が怖い」と感じるようになり、【日本で就職するかどうか悩む】(BFP12) ようになった。同じ大学院に通い同棲中だった彼女も、大学院を卒業後はオンと一緒に日本で就職する方向で当初は考えていたが、彼女の両親が日頃から彼女の本帰国を待ち望んでいた (SD11) こともあり、彼女自身もこの時期にオンと一緒に帰国を考えるようになっていた (SD12)。そして二人で今後についての話し合いを重ねる中で、両親との距離感も心配になったオンは、自分にとって「日本はやっぱり外国だ」という認識をさらに深めていくことになり、最終的には【帰国する方向で決定】したのであった。このように、B 大学での留学生活が始まって以降の 6 年間、「日本という場所」に対して、地震以外のことは何もネガティブに捉えたことはなかったオンだが、実際に学生から社会人に役割が切り替わるタイミングで、初めてネガティブな要素として日本の社会文化のことを認識するようになり、オンの中での「日本という場所」についての認識に大きな変容が確認された。

【帰国する方向で決定】後、中国で就職することを決めたオンだったが、中国よりも就職活動時期が早いということで、「自分の適性にあった職種を早く知りたい」と考えたオンは、【日本の就職活動時期の流れに乗り、就職活動を始めた】(BFP13)。そして「自分は C 大学の院生だから、どんな企業でもエントリーシートを出せば恐らく受かるだろう」と楽観的に考えていたオンは、【業界業種問わず 40 社ほどの大企業に申し込んだ】。しかし現実はそう甘くなく、申し込んだ大企業の半分以上はエントリーシートの段階で落ち、残りの大企業からも 2 次面接で落とされ、最終的には【日本企業からは全て不採用通知】という散々な結果が待ち受けていた。研究と就活の両立が困難 (SD13) で、「両方ともやるべき時間が全然足りなかった」と当時の状況を振り返るオンだが、「C 大の院生なのになぜ受からないのか」とかなりショックを受けたという。そして最終的には【大手外資系企業 2 社から内定を得る】(BFP14) ことができたが、【日本企業からは全て不採用】だったという【結果に酷く落ち込んだ】。大学院受験失敗に続く 2 度目の大きな挫折を味わったオンであるが、その後、友達や先輩などの就活体験談を聞く中で (SG23)、これまで大学名などの肩書きに固執しすぎていた【自分の安易な考え方に対する気づき】、「肩書きはあくまでも名刺みたいなもので、最終的には何事も自分の能力と表現次第だ」と考えを改めるようになったという。

このように挫折が起こった時、「悔しい。自分自身を証明したい」とがむしゃらに挑戦し続けた第 1 期と異な

り、第 2 期では目の前で起こった出来事に対して「自己内省」ができるようになり、自分の能力や気持ちを見極めて「無理なこともある」といったように、自己認識にも変化が見られるようになったことが明らかになった。

(4) 第 3 期：アウトサイド・イン後期

—自己=外部環境 “に” 適合させるもの

日本での就活結果に関わらず帰国することを決めていた (SG24) オンは、いい企業だが日本で働く必要があるという理由から【日本で内定を得た外資系企業の 2 社ともを辞退する】(BFP15) ことにした。そして【中国での就職活動を始め】(BFP16)、【60 社ほどの企業に申し込んだ】。オンは、日本での就活経験による慣れ (SG25) に加え、就職結果に関わらず帰国すると決めていた (SG24) こともあり、中国で就職活動も【あまり順調ではなかったが焦りはなかった】と振り返る。そして面接で会社の上司と話す中で、働くことに対しての自分の考えの甘さに気がついたという。「単純的に仕事をちゃんとやって、お金をもらって、経験を集めたらいい」と自分のことだけを考えていたオンは、面接を通して「社内でのコミュニケーションスキルはもちろん、他人の視点や立場に立って相手を思いやる能力が必要だと気づき、勉強しなければいけない」と感じたという。そしてこのような気づきを重ねるうちに、「キャリアを計画する」ことの大切さを学んだという。最終的に【4 社から内定を得た】(BFP17) オンは、高収入かつ高待遇 (SG26) であることに加え、キャリアに「安定性」があるとして、両親も賛成していた (SG27) ことから、【母国の国有会社に就職を決意し、内定を受諾】(BFP18) した。このように中国の就職活動におけるオンの語りや気づきからは、「アウトサイド・イン」による「キャリアの意味づけ」に対する認識が新たに確認された。オンは、【C 大学院を卒業】(OPP4) 後、同じ中国国内の都市で内定を得た彼女と一緒に帰国し、【国有会社に入社】(BFP19) した。【仕事が軌道に乗り始めた】当初は、社内環境や福利厚生が手厚い (SG28) ことに加え、社長も優しく、上司も自分以上にやる気がある (SG29) ことで、オンのやる気も満々だったといい、残業しないように毎日頑張っていたという。そしてそのような環境の中で、充実度や幸福度がともに高い環境 (SG30) で毎日過ごさせていたと振り返る。

(5) 第4期：インサイド・アウトへの変容期 —自己=外部環境“と”適合させるもの

しかし半年が経っても、入社時に聞いていた担当予定業務を任せてもらえず、話に聞いていたのとは異なる細かい仕事ばかり（SD14）で、日本語を使うチャンスもあまりなく（SD15），「同じような仕事の繰り返しでつまらない」と業務内容にギャップを感じ始めたオンは，【変わらない業務に嫌気が差す】（BFP20）ようになったという。そして無理な残業も多く（SD16），自分のやりたいこと（趣味など）ができない日々も続いたことで、オンは【転職を考えだす】ようになった。ただ、高待遇と安定を手放すことに迷いもあった（SD17）オンは、まずは転職アプリを活用し（SG31）自分の履歴書をアプリに登録することで、様子を見ることにしたという。すると転職アプリを通して、毎日多数の日本企業から面接へのオファーが来るようになった（SG32）。このような引く手数多な状況を前に、「今の仕事を辞めたとしても転職するのは難しくないかも」と感じるようになったオンは、入社半年という早さで【転職を決意し、転職活動を始める】（BFP21）ことにしたのであった。学生時代から支えてくれた彼女は、もちろんオンの考えに最初から賛成だったそうだが、高待遇で安定の国有会社を辞めることを両親に相談すると、最初はやはり少し反対された（SD18）という。しかし両親としっかり話し合い、自分の気持ちを伝えることで、両親からの理解も得ることができた（SG33）そうだ。そして「自分の人生だからやりたいことをやりたい。安定だけでは、自分の夢は叶わない。」とキャリアに対しての認識を改めていく姿が語りから明らかになった。その後【国有会社を辞めた】（BFP22）オンは、10社から連絡をもらったが、5社に絞って面接を受け、最終的に【日本企業2社から内定をもらう】ことができたという。オンは、どちらの企業に転職するか悩んだが、自分の専門性が活かせること（SG34）と、通勤の便利さ（SG35）、転勤の可能性の低さ（SG36）、試用期間の短さ（SG37）を比較したこと、最終的に【総合化学メーカーに転職】した（BFP23）。

転職後、【日本語を生かして就労経験を積む】（EFP1）の中で、オンは現在、ワークライフバランスがきちんと保たれた状態（SG38）で、【自分の長所を生かし、自分らしく働く】（2nd EFP）ことができていると語る。また「自分らしく働く」ということについて、オンは「今のタイミングの自分にとっては、自分の長所やこれまで学んできた知識を利用して、自分の適正にあった仕事を

安定して楽しく続けるということだと思う」とし、外部環境に対して、自分の長所や適性に合っているのかどうか、「気づいて調整していく力」が重要だと語った。このように第4期では、オンの「自己認識」や「キャリアの意味づけ」に対しての認識や価値観が、「肩書き」や「安定性」に重点を置いた「アウトサイド・イン」から、自己の内側に重点を置いた「インサイド・アウト」によるものへと変容する姿が明らかになった。

3. センのキャリア観形成プロセス

(1) 2nd EFP に至るまでの経緯

センの語りからは、日本での留学生生活や就職経験を通して、「日本という国」に対しての意識や価値観に「アウトサイド・イン」から「インサイド・アウト」への大きな変容が見られた。またそれらがセンの人生や生きるまでの選択、キャリア観と相互作用していることが明らかになったため、2nd EFP（自分の適性にあった仕事を通じて、自分らしく働く）に至るまでのプロセスを、「日本という国」に対しての意識や価値観が大きく変容した出来事や行為選択である分岐点（BFP）に注目し、以下5つの時期に区分した。

第1期：アウトサイド・イン前期

—憧れの国・日本

第2期：アウトサイド・イン中期

—住みたい国から働きたい国へ

第3期：アウトサイド・イン後期

—夢が叶えられる国・日本

第4期：インサイド・アウトへの変容期

—第二の国・日本

第5期：インサイド・アウト構築期

—努力が報われる国・日本

以下、統合したTEM/TLMG図（図7～図9）の第一層（TEM図部分）に示した各時期における経験や葛藤についての詳細を時系列に沿って記述し、それらがセンの「日本という国」や「キャリアの意味づけ」に対しての意識や価値観にどのような変容を与えたのか、第二層、第三層で可視化された変容プロセスをもとに分析する。

図7 センのTEM/TLMG図・第1期～第2期

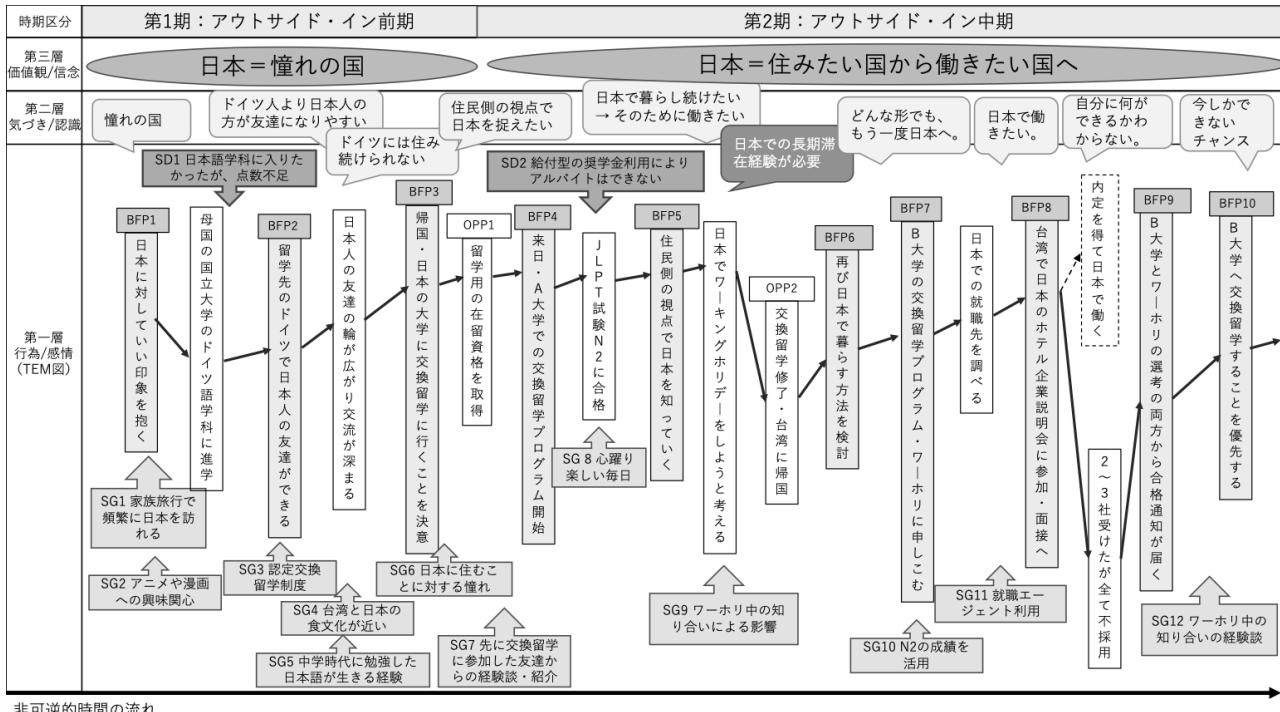


図8 センのTEM/TLMG図・第3期～第4期

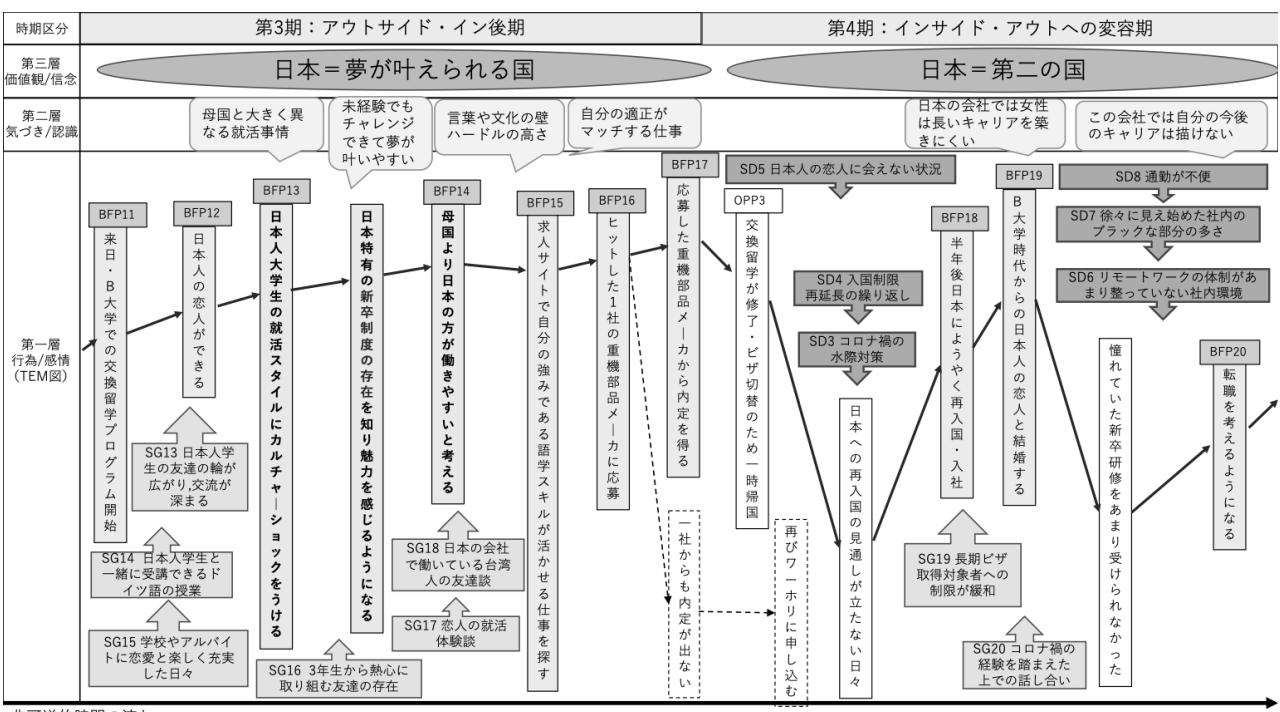
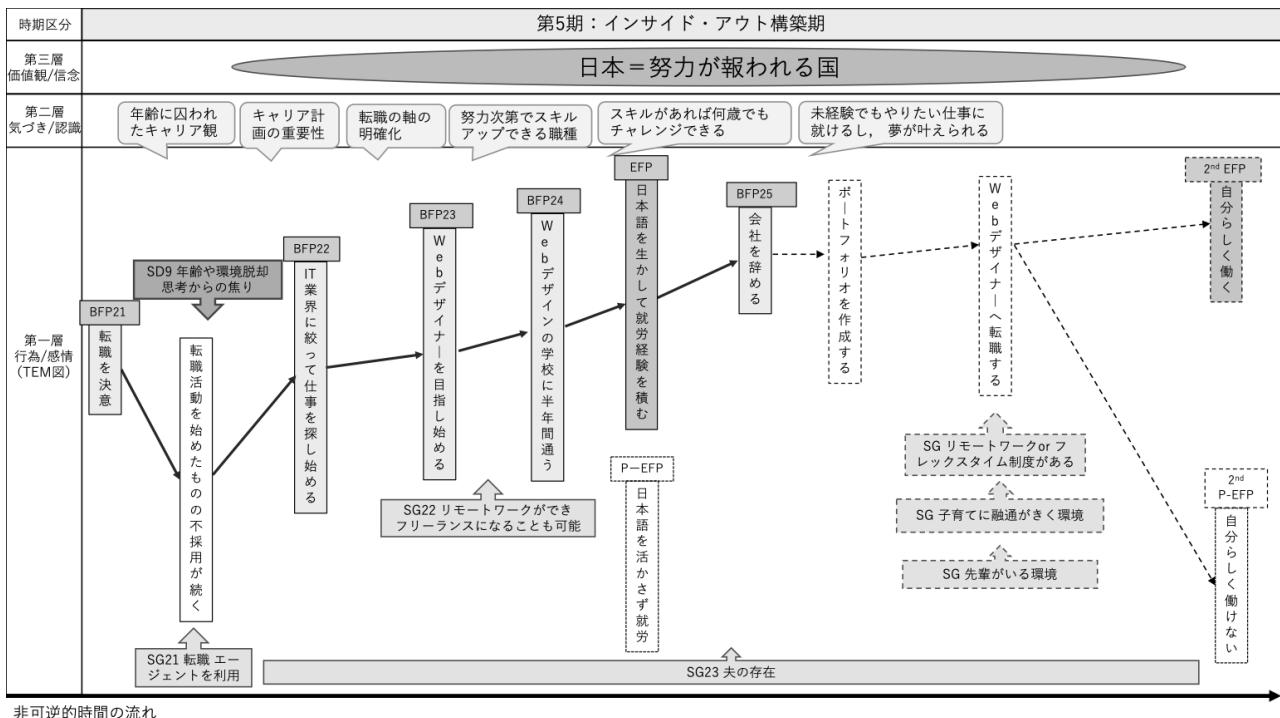


図9 センの TEM/TLMG 図・第5期



(2) 第1期：アウトサイド・イン前期—憧れの国・日本

幼い頃から家族旅行で頻繁に日本を訪れていたこと (SG1) や日本のアニメ・漫画への興味関心 (SG2) から、【日本に対していい印象を抱く】(BFP1) ようになったセンは、元々海外で暮らしてみたいと考えていたこともあり、「一度住んでみたい国」と日本に憧れを抱いていた。そして、高校時代に1年間ドイツへ交換留学に行った経験から、母国の国立大学のドイツ語学科に進学したセンは、大学2年生時にも、認定交換留学制度を利用して (SG3)，再度ドイツへ半年間の留学を行った。センはこの半年の間に、【ドイツで日本人の友達ができる】(BFP2) という日本語が上達する上で大事な経験をしたと語る。台湾出身のセンと同じ寮に住んでいた日本人留学生たちは、食文化が近いこともあり、食事を通して仲が深まりやすかった (SG4)。またセンが日本語を少し話せたおかげで (SG5)，彼女たちとコミュニケーションも取りやすかったことから、【日本人の友達の輪が広がって交流も深まった】そうだ。センはこの経験から「ドイツ人より日本人の方が友達になりやすい」と感じたという。また彼女たちと半年間共に過ごす中で、自身の日本語も上達したという。そしてドイツでの出会いと経験、そこからの気づきは、センの中に当初からあつ

た「日本に住んでみたい」という日本に対する憧れが高まる (SG6) ことにもつながった。またこの時点で既に何度も訪れていたドイツに対しては、進学や就職のことなど将来のことを見据えた結果、「ドイツでの暮らしは自分に合わなかったし、外国人として働いたり、住み続けたりするのは難しい」と気がついたという。そして同時に、日本に対しても「観光客側の視点では日本のことを見ているが、実際に住んでみるとわからないこともあるはず」といったように「観光客側の視点」から「住民側の視点」について日本を捉え始めたことが明らかになった。ドイツから台湾に帰国し、残っている単位を全て取り終えた4年生の後期に、周りの友達のアドバイスにも背中を押され (SG7) 【日本の大学に交換留学に行くことを決意した】(BFP3) センだが、この時点ではあまり自分自身の「キャリア」までは深く考えていないかったという。この当時は「日本で働くことはすごく難しいこと」と捉え、日本での将来像までは描けていなかったセンだが、「日本語」に対しては、「台湾でも、日本語ができたら仕事の選択肢も増えるので、だから、日本語勉強しました」といったように「将来の就職の時点で役に立つ」と考えていたという。そして同様に「将来の就活時に役に立つかかもしれない」と考え、日本への交換留学前にはTOEICにもチャレンジしていた。以上のような気づきやそれに伴う行動は、自己の外側の「環境」「言

語」に重点を置き、そこに自己を適合させる「アウトサイド・イン」によるものだと捉えることができる。

(3) 第2期：アウトサイド・イン中期

—住みたい国から働きたい国へ

【在留資格「留学」を取得】(OPP1) 後、【来日し A 大学での交換留学プログラムを開始】(BFP4) したセンは、給付型の奨学金制度を利用していたため、アルバイトはできなかった (SD2) が、憧れの日本での生活に心踊る日々 (SG8) の中で、勉強面でも努力し、来日 2 ヶ月後に JLPT 試験を受け【N2 を取得】したという。また日々の生活において、徐々に日本の社会制度や福利厚生のことなど、【住民側の視点で日本を知っていく】(BFP5) 中で、センはドイツの時とは異なり「それでも日本で暮らし続けたい」と思ったという。そして同時に「暮らし続けるために日本で働きたい」というようにも考えるようになり、センの中で「日本という国」に対しての意識に変化が起きていた。そして日本で働くようになるためには、「日本に長くいる経験が必要」だと気づいたセンは、当時日本でワーキングホリデーをしていた知り合いの影響もあり (SG9)、【日本でワーキングホリデーをするという選択肢】も視野に入れ始めたのであった。【A 大学での半年間の留学生活が終わり、台湾に帰国した】(OPP2) センは、「また日本に行きたい。どんな形でも日本に行きたい」という気持ちを強め、【再び日本で暮らす方法を検討】(BFP6) し始めた。色々と模索する中で、A 大学留学中に取得した N2 の成績を活用して (SG10)、姉妹校である【B 大学の交換留学プログラムに申し込み】(BFP7)、プログラム参加可否に関する選考結果が出るまで少し時間があったことから、同時に【日本のワーキングホリデーにも申し込んだ】(BFP7)。また「日本で働きたい」という気持ちも強まっていたセンは、【日本での就職先についても調べる】ようになり、就職エージェントに相談したという。そしてエージェントの勧めもあり (SG11)、自分の強みである「言語力（*語学力）を活かせる」ということで、日本のホテル業界での就職を希望するようになった。そして台湾で行われたエージェント主催の【日本のホテル企業説明会に参加了】(BFP8) センは、【日本のホテル企業 2~3 社の面接に申し込んだ】(BFP8)。しかし「面接中は日本語の誤用に気をつけることに精一杯で、ホテル業界で必要不可欠な笑顔といった表情までは全く意識できなかった」と振り返るセンは、【2~3 社受けたものの全て不採用】という結果を目の当たりにし、「やっぱりもう一度 B 大

学で日本語を勉強した方がいいと思った」そうだ。そしてこのタイミングでちょうど【B 大学とワーキングホリデーの選考の両方から合格通知が届いた】(BFP9) センは、日本でワーキングホリデー中の知り合いの経験談を思い出し (SG12)、「ワーホリはいつでもいけるが、学費不要の交換留学は今しか行けない。せっかくのチャンスだ」と考え【B 大学へ交換留学することを優先した】(BFP10)。

このように第2期においては、「住みたい場所」から「暮らし続けたい場所」「働きたい場所」へといったように、センの中にある「日本という国」に対しての意識の変容が確認された。一方でキャリア意識についてはまだはっきりとせず、日本で働く自分像が描けないなりにも、周囲に頼りながら、今あるスキル（語学力）を活かせる場所を模索していく姿が明らかになった。

(4) 第3期：アウトサイド・イン後期

—夢が叶えられる国・日本

第3期において、【B 大学での交換留学を開始した】(BFP11) センは、「日本語をもっと上達させたい」と考え、日本人学生との積極的な交流を図ったり (SG13)、アルバイトを掛け持ちしたりと自ら色々な場所へ飛び込んでいくことで、楽しく充実した日々 (SG15) を過ごしていた。そのような日々を過ごす中で、日本人の恋人もでき (BFP12)、学校やアルバイトに恋愛と、日本での生活において様々なところにセンの居場所が開拓されていく様子が明らかになった。

B 大学での充実した留学生活を過ごす中で、センは【日本人大学生の就活スタイルにカルチャーショックを受けた】(BFP13) という。B 大学での授業課題で「日本の大学生の就職観」についてインタビュー調査をしたことがあるセンは、その当時から「日本人学生は就活に熱心」という印象を抱いていたが、実際にセンが仲良くなった友達も、大学 3 年生になると就活に熱心に取り組むようになり (SG16)、その姿を目の当たりにしたセンは、かなりカルチャーショックを受けたという。そしてその裏で、センは徐々に「母国の台湾と日本の就活スタイルには大きな違いがある」ことに気づき始めたそうだ。さらに、同じ外国語学科所属だった恋人から IT 企業の内定をもらった話を聞き (SG17)、センは「日本特有の新卒制度の存在を知り、魅力を感じるようになった」という。また彼の就活体験談 (SG17) によって「日本では就職先は未経験分野でも OK」ということを知り、「入社後の研修制度の存在」にも強く惹かれ始めたセンは、

「母国と日本の就活事情の違い」についてさらに認識を深めていった。そして日本の会社で働いている台湾人の友達から（SG18），福利厚生なども母国よりも日本の会社の方が手厚いことを知ったセンは，徐々に【母国よりも日本の方が働きやすいと考える】（BFP14）ようになった。このように働く上の母国と日本の違いをさまざまな角度から実感したセンは，「日本という国」を「未経験でもチャレンジできて，母国よりも夢を叶えやすい場所」と認識するようになり，これまで以上に「働く場所」として，日本を魅力的に感じるようになった。ただその一方，自分自身が実際に日本で就職活動に取り組むとなると，やはり「母国の就活と異なり，言葉や文化など支障が大きい」と感じ，「普通に就活して一般的な会社に入ることは難しいのではないか」と考えたという。そこで，「自分の適性がマッチする仕事を知りたい」と考えたセンは，求人サイトを中心に，【自分の強みである語学スキルが活かれる仕事を探した】（BFP15）。そしてこれまで，キャリア形成に対して，自分自身のスキル（語学力）を活かせるということを第一に考えていたセンだが，この第3期での本格的な日本での就職活動時期においてもその軸はぶれず，他の人にはない自分だけの強み（語学力）を活かして就職活動にチャレンジしたそうだ。その結果，語学力の条件が自分にぴったりな会社と出会うことができ，【応募した重機部品メーカーから内定を得る】（BFP17）ことができたのであった。

このようにして第3期においては，「働く上で夢が叶えられる場所」として母国よりも日本を魅力的に捉えるようになったことで，これまで以上に他の人にはない自分だけの強み（語学力）を重視して，自分の適性と合う仕事を周囲に頼ることなく自ら積極的に模索しようとする姿が明らかになった。

（5）インサイド・アウトへの変容期—第二の国・日本

無事【応募した重機部品メーカーから内定を得る】（BFP17）ことができたセンだが，その後【交換留学が修了し，ビザ切り替えのために一時帰国をした】際に（OPP3），コロナ禍の水際対策に巻き込まれ（SD3）日本へ再入国ができなくなった結果，センは当初の予定から【半年遅れて入社する】（BFP18）ことになった。入国情限が何度も再延長され（SD4），日本への再入国の見通しが立たない日々は，日本にいる恋人にも会えず（SD5），日本で得た内定が突如取り消されないか心配が常に付きまとう辛い日々だったが，センは決して諦めず前を向いて，日本での仕事に備えて台湾でできることを続けたと

いう。B大学時代からの恋人とは，センの再入国後に二人で話し合い（SG20），今後また入国情限などかかる事態が起こっても配偶者だと入国できて会えるという理由を踏まえて，2人は【結婚する】（BFP19）ことにしたそうだ。

【半年遅れてようやく入社できた】（BFP18）センだが，【憧れていた新卒研修をあまり受けられなかった】ことで，「大手の会社と違い，小さい会社では新卒研修制度が整っていないところもある」ということに気づき，入社早々，会社に対してギャップを感じ始めた。そしてその後も，リモートワークの体制があまり整っていないことや（SD6），会社までの距離が遠いことに加え（SD8），仕事に慣れるうちに社内のブラックな部分の多さが目につくようになり（SD7），半年も経たないうちに【転職を考えるようになった】（BFP20）。そして転職を頭の片隅に置きながら，社内の現状と自分自身の今後のキャリアを照らし合わせたことで，「会社と自分の将来に不安感」を抱くようになったという。その後さらに，「小さい今の会社では社内でステップアップができない」ことに気づいたセンは，「自分の今後のキャリアはこの会社では描けない」といったように，転職の意思を固めていった。また社内で働くうちに，結婚や出産で仕事から離れる他の社員の姿を見て「日本では，女性は出産や子育てのこともあって会社で長く働けないことが多い」ということに気づいたセンは，「転職先はリモートワークが可能な仕事やフレックスタイム制度が充実している会社で働きたい」と，将来の子育てを見据えて意識するようになったという。

このように第4期においては，学生から社会人へと人生における役割が移行し，コロナ禍での社会人生活が始まる中で，センはこれまで不透明だった自分自身のキャリアを徐々に主体的に描き始めた。そして社内での様々な経験や気づきを経て，外部環境と自身のキャリア観を照らし合わせるようになったセンは，それらのミスマッチに気がつき，調整し始めていく姿が明らかになった。この変化はまさに，溝上（2004）で指摘されていた「アウトサイド・イン」から「インサイド・アウト」への生き方への転換と捉えることができるのではないだろうか。またこのときのキャリア観として，女性としてのライフスタイルに影響されることなく自らスキルアップし，それに応じたステップアップができる環境を重視し始めたことも明らかになった。

(6) 第5期：インサイド・アウト構築期

—努力が報われる国・日本

外部環境と自分自身のキャリアを照らし合わせることでミスマッチに気がつき、【転職を決意】(BFP21)したセンだが、当初は「とりあえず一刻も早く会社を辞めて別の会社に転職したいと焦っていた」こともあり(SD9)、転職エージェントを利用したものの(SG21)、【不採用結果が続いた】という。転職活動がうまくいかなかつた原因を冷静に分析したセンは、「自分の年齢に焦りを感じていた」と振り返り、同時にこの時期、「日本でのキャリア育成は、若いうちにやらないといけない」といったような、「必要以上に年齢に囚われたキャリア観」を抱いていたことに気づいたという。自分自身の焦りの原因と本当にしたいことは何か、そして転職で何を重視するかなど、ここでも自分の気持ちに真剣に向き合ったセンは、徐々になりたい職業とそのために必要なスキルが明確になっていったという。そして夫の影響もあり、自主的にスキルアップができる業界として元々興味を抱いていた【IT業界に絞って仕事を探し始めた】(BFP22)センは、Webデザイナーが「IT業界の中でも短時間で達成感を得られやすい」ことや「自分の努力次第でスキルアップできる職種」だと気づいたことで、【Webデザイナーを目指し始め】(BFP23)、【Webデザインの学校に半年間通う】ことにした(BFP24)。【日本語を生かして就労経験を積み】(EFP1)現在は、【会社を辞め】(BFP25)、【Webデザイナーへ転職する】ために必要な【ポートフォリオを作成中】のセンは、自分にとってのキャリアを「ゴールがどんどん出てくるマラソン」だと捉えているという。

このように第5期において、「キャリア早期育成」に重きを置いていたセンの当初の「アウトサイド・イン」によるキャリア観は、「自分の年齢より大事なことがわかり、転職の軸が明確になった」ことで、自分が目指すWebデザインは「スキルがあれば何歳でもチャレンジできる」と気づき、これまでの過程や経験を重視する「インサイド・アウト」による「キャリア着実育成思考」へと変容したことが明らかになった。

4. 考察

—3名のキャリア観の変容プロセスからみえるもの

留学スタイルや期間、性別が異なる3名ということも

あり、学生時代の経験や葛藤、認識の変化は三者三様で多様性に富んでいたが、学生から社会人へと移行した直後には、入社わずか1年内に「転職を決意する」という3名共通の経験が確認された。また、この選択に至るプロセスにも類似性が見られた。それは入社後、社内で様々な経験や気づきを得たことで、これまで「受動的」に捉えていた自分自身の「キャリア」を徐々に「主体的」に捉えるようになり、それによって外部環境と自分自身のキャリア観を照らし合わせることで、現状のミスマッチに気がつくというものであった。そしてその後3名は転職活動を経て、「外部環境と自分自身を適合させる」ことで、それぞれが【自分らしく働く】といった(2nd EFP)にたどり着く姿が確認された。

このような環境と個人の適合を溝上(2004)の「アウトサイド・イン」「インサイド・アウト」という2つの概念から捉えると、「自分自身も“将来は文系の留学生の定番ルート”を辿るものだ」と考えていたガクのキャリア観や、「肩書き」に固執していたオンのキャリア観、「年齢」に囚われていたセンのキャリア観など、3名それぞれが当初抱いていたキャリア観は、まさにこの「アウトサイド・イン」による考え方といってよいだろう。一方、社会人になり、社内で様々な経験や気づきを得たことで、「外部環境と自分自身を適合させる」ようになった彼らの「キャリア観」は、「自分自身が本当にやりたいこと」や「将来の目標」を見つけ、外部環境すなわち「生きる“場所”」を自分自身で決めていく「インサイド・アウト」な生き方と捉えられるのではないだろうか。前述したように、3名の「キャリア観」の形成過程には多様性が見られたが、受け身的意識から主体的意識へと外部環境の変化に合わせて変容するプロセスには共通性が確認された。この3名のキャリア観の変化は、まさに「アウトサイド・イン」から「インサイド・アウト」への生き方の転換ともいえるだろう。

また本研究の分析からは、「留学の意味」や「自己認識」、「日本という国」に対しての認識にも変容が確認され、その変容は様々な経験、特に周囲の人との「出会い」と「環境」に深く関わっていることが確認された。以上を踏まえて、留学生のキャリア支援に対する実践への示唆として、留学生生活の早期から自分自身のキャリアに対する意識づけを行い、その際には、これまで自分が歩んできた軌跡を振り返り、自分は何をしたいのか、将来どうありたいのかといった未来を見つめる場を提供していく必要があるのではないだろうか。留学生の「インサイド・アウト」に基づくキャリア支援をどのように位置づけ、実践していくかが今後の留学生のキャリア支援にお

ける課題となるだろう。

5.まとめと今後の課題

本研究では複数名の外国籍日本留学経験者を対象とした調査を行い、留学や就職経験に伴う径路の多様性を、その背景にあるそれぞれの生き方や働き方を規定する「主観的キャリア」に踏み込んで明らかにした。またTLMG分析によって、調査協力者たちの行動の背後で変容する多様な軸を導き出した。これらの知見をもとに、今後は異なる地域からの留学生を対象にした調査を重ねていくことで、変容軸の多様性や共通性を見出し、それに対応するキャリア支援の在り様を検討していきたい。

また今回は偶然にも3名とも、日本での留学生活を通して現在のパートナーに出会っていたが、進学や就職活動、転職経験など人生の転機において、パートナーの有無や相手の出身地は、調査協力者の行動選択に大きな影響を与えると考えられる。よって今後は、パートナーの存在にもより着目し、パートナーがいる場合は、調査協力者本人とパートナーのキャリア観がどのように相互作用したのか、いない場合は、他にどのような出来事が彼らの行動選択に大きな影響を与えたかなどについても明らかにしたいと考える。

引用文献

- 浜口恵俊（1982）間人主義の社会日本. 東洋経済新報社.
- 溝上慎一（2004）現代大学生論—ユニバーシティ・ブルーの風に揺れる. 日本放送出版協会.
- 溝上慎一（2010）現代青年期の心理学—適応から自己形成の時代へ. 有斐閣選書.
- 日本学生支援機構（2023）2023（令和5）年度
外国人留学生在籍状況調査結果 <https://www.studyinjapan.go.jp/ja/statistics/enrollment/data/2405241100.html>（情報取得2024/07/14）
- サトウタツヤ（2015）複線径路等至性アプローチ（TEA）.
安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ（編），
TEA理論編—複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ（pp. 4-8）. 新曜社.
- 末廣啓子（2013）地方圏における外国人留学生の就職に関する課題と実態—栃木県における外国人留学生のキャリアデザインと企業のグローバル化をめぐって.

- 宇都宮大学教育学部紀要, 63 (2013), 279-295.
- Super, D. E. (1990) A life-span, life-space approach to career development. In D. Brown, L. Brooks, & Associates (Eds.), *Career choice and development: Applying contemporary theories to practice* (pp. 197 - 261). San Francisco: Jossey-Bass.
- 寅丸真澄・江守悦子・佐藤正則・重信三和子・松本明香・家根橋伸子（2018）留学生のキャリア教育とキャリア支援の「ずれ」を考える—日本語学校・短大・大学（首都圏・地方）の留学生の語りから. 言語文化教育研究, 16, 240-248.
- 寅丸真澄・中山由佳・齋藤真美（2019）留学生のキャリア調査報告—日本語学習者のキャリア支援に向けて. 早稲田日本語教育実践研究, 7, 23-30.
- 渡部裕子（2020）留学生の「定着」に関わる「主観キャリア」研究の課題と展望—日本語教育からのアプローチ. 長崎総合科学大学紀要, 60 (2), 101-110.
- 山本晋也（2018）言語・文化・キャリアの教育を巡る日本語教育の展望と課題. 早稲田日本語教育学, 25, 41-60.
- 山本晋也（2019）留学生のキャリア形成プロセスとは何か—TEM 及び TLMG による可視化を通じて. 早稲田日本語教育学, 27, 81-99.

謝 辞

本論文を作成するにあたり、査読者の先生をはじめ、多くの方々から細やかなご配慮・ご指導を賜りました。この場をお借りして、心より御礼を申し上げます。

発行：TEA と質的探究学会
Japanese Association of TEA for Qualitative Inquiry
<https://jatq.jp/index.html>



編集・制作協力：特定非営利活動法人 ratik
<https://ratik.org>

